

「青色が写真にうつらない」とはどういうことか

横山 英明

現行券の中でも最古参の大黒一円券。これまでの紙幣には見られなかった、淡い青色のインキが使われている。なぜ主模様は青色が採用されたのか。各書籍を読むと、写真による偽造を防止する方策であったことが記されている。たとえば『矢野道也伝記並論文集』九〇三頁には次のような記述を見ることができる。

この紙幣を青色に刷った訳は当時写真術を悪用して偽造を試みるもの多く、当時の写真術の進歩の程度に於ては白紙に青色で刷つたものは之を印刷する事が出来なかつたからである。

また、紙幣研究家の植村峻氏は、自身の著書『紙幣肖像の歴史』で次のように説明する。

印刷面の最大の特徴は、大黒天や文字などの図柄を淡い空色のインキで印刷したことであつた。これは当時やつと普及し始めた写真製版による複製を防止するためであり、当時の写真技術では淡い青色は複写がきわめて困難であつたため、四券種とも空色を基調色に採用したものであつた。(九七頁)

「へえ、そうなんだ」と読み流してしまえばそれまでなのだが、カメラについてまともな知識もない筆者からすると、これらの短い文章には疑問に思う点が沢山ある。①明治時代中期に使っていたカメラとはどういうものか。②そもそも、青色が撮影しにくかつたのは本当か。③本当であるとして、それはどういうメカニズムによるのか。

紙幣に関する本を色々読み漁ってみたが、いずれも「青色は当時撮影できなかった」ことを述べるだけで話が終わってしまうのである。

カメラメーカー数社に問い合わせしてみたが、明治時代のカメラについては情報を持ち合わせていないらしく、まともに取り合ってくれなかつたり、満足いく回答がもらえなかつたり、残念な結果となつてしまつた。

図書館や書店でカメラに関する書籍を探したものの、最近発売されたカメラを取り上げる雑誌やら、撮影テクニクの指南本などばかりが目につき、明治時代の古いカメラについて詳しく述べた文献を探すのは非常に骨の折れる作業で、しかも、苦勞に見合った良い情報を入手することはできなかった。

日本のカメラ史の黎明期について造詣が深い

人を探して、その方から教示を得た方がはるかに高効率であると悟つた筆者は、インターネットで色々調べ、その結果、「日本カメラ博物館」なる施設が存在することを知つた。ウェブサイトには、「国内外の貴重なカメラや写真を多数保有」「日本のカメラの発展史を系統的に展示」という自己紹介が載っている。きつと古いカメラにも詳しいと聞いて、直感した筆者は、同館に宛てて質問状を郵送した。

すると、一週間も経たないうちに返信が来た。回答してくださつたのは、博物館課主任学芸員の井口芳夫氏。ちなみにこの御方、NHKの人氣番組「チョコちゃんに叱られる！」に「カメラ一筋44年」の専門家として出演したこともあるカメラ研究の第一人者だ。

井口氏から頂いた回答は、当時使われていた四角い箱型のカメラの画像などが添付された、大変丁寧なものであつた。

なぜ青色が撮影できないのか、その原理がいつに分かつたので、以下、井口氏の回答に、筆者が調べたことを補足しながら説明する。

大黒札の発行された明治一〇年代末ころ、主に使われていたのは、木箱を入れ子式にした構造の「スライディングボックスカメラ」や、蛇